



執り成しの祈り、兄弟・同胞・隣人

兄弟・隣人・父子・子ら・夫妻・イスラエル人と異邦人
(同胞)

2018.4.9

「主を恐れる者の祈りは、旧約聖書のリーダーたちは、民の罪のとりなしのために祈っているけれど、新約聖書のイエス様をはじめ、弟子たちのとりなしの祈りが、兄弟の罪を赦すことというのが、つながりにくい。ソロモン、アブラハム、モーセたちの祈りも兄弟の罪を赦すということなのか。兄弟の意味はわかるけど、もっと指導者としもべというはつきりとした上下関係があるので、立場が違うのではないか。」

- ・モーセと兄弟 出2:11-14, 使徒7:23-29 兄弟を賣みる
- ・父と子、牧者と羊々、善く者 良い牧者 -ヨハネ10:1-10:16: 「父のあらゆる事-11:25:
- ・申命記 17:14-20 王のじが兄弟の上に高ぶることがないように。
- ・王とおみる民 14:10-18:1-このせめのをそ 一日、ハロ、アビメレク、タビア、アハア" (ウリヤ) (ヤハウ)
- ・(10 妻、火田)
- ・僕に手いたい者は、マルコ10:42-45 (仕えみ者、いもべ)
- ・兄弟と手ひきことをやべとしむい ハズレ2:11, 17 おれれみ深い患実を大祭司。
ハズレ9: 年に一度のあがまの日 (ヨハネ10:1-7月10日)
レビ記16:29-34

兄弟の罪をとりなすそのとりなしの祈りというものは、「王様の知恵、支配する者たちの知恵の祈りだ」ということを学んできたところで質問がありました。

「イエス様と弟子たち、この時に兄弟の罪を許すと言われているのは分かる。ただ、アブラハム、モーセ、ソロモンという民の罪のとりなしの祈りをしている時には、もっと指導者と民、指導者としもべという上下関係があるので、少し違うんじゃないでしょうか。」という質問がありました。

まず、モーセは自分の民のことを兄弟と言います。兄弟と訳されているところと同胞と訳されていました。これはヘブライ語は元々同じことばですけれど、出エジプト記2章のモーセが40歳になった時の話ですね。大人になった時に彼は兄弟の所に行って、その苦役を見たと。自分の兄弟である一人のヘブル人をあるエジプト人が打つて、そのを見ましたという話があります。「誰が私たちのつかさやさばきつかさにしたのか」というストーリーがここに書かれていますけれど、ここは同胞という訳になっていますが、これは兄弟ですね。

このことはステパノも使徒行伝7章の弁明のところで引用をしています。7章23節で同じところのことを言いますね。40歳になった頃、モーセはその兄弟であるイスラエル人を顧みる心を起こしました。そして、その一人が虐待されてるのを見て、その人をかばい、エジプト人を押し倒して乱暴されているその人の仕返しをしました。彼は自分の

手によって神が兄弟たちに救いを与えようとしておられる事を皆が理解してくれるものと思っていましたが、彼らは理解しませんでした。翌日、彼は兄弟たちが争っているところに現れ、和解させようとして、あなた方は兄弟なのだ。それなのに、どうしてお互い傷つけあっているのかと言いました。それと隣人を傷つけている者がモーセを押しのけてこう言いました。誰があなたをわたしたちに支配者や裁判官にしたのか。昨日エジプト人を殺したように私も殺す気か。この言葉を聞いたモーセは、逃げてミデアンの地に身を寄せました。

兄弟、隣人、他の訳だと同胞になっていたりしますね。隣人、兄弟、同胞、イスラエル人というのも兄弟たちのことを表している。異邦人とイスラエル人。イスラエル人というのは、同じ父親の子供達っていうことですね。アブラハム、イサク、ヤコブの子らのことをイスラエル人と言っていますので、その子供たちですから、兄弟たちということになりますよね。その兄弟と言ってる時に、隣人も兄弟と同義語、類義語として使われますし、イスラエル人の事を兄弟たちというように呼んだりしているわけです。

それで、モーセは兄弟を顧みる。イスラエル人を顧みる心を与えられましたと言われているところが、出エジプト記2章のところにあります。確かに、モーセは兄弟として導くということではありますけれども、父親が子供を導くような感じでもあります。アブラハムは偉大な父だし、アブラハムは父で甥を助けようとしているのですね。モーセは父のようなもの。父の代わりみたいなものですね。それでソロモンは、ダビデの子のリーダーという感じですね。ダビデの子らのリーダーとしてのソロモンですから、父のようでもあり、兄弟のようでもあります。

この人たちは牧者です。羊飼い。導く者、指導者、導く者が牧者のイメージとして考えると良いんだと思います。羊たち、イスラエル人、羊たちを導く良い牧者。これは福音書の方です。良い牧者のイメージというのは、ヨハネの10章にあるように、「良い牧者は自分の羊のために命を捨てる」という箇所があります。ルカ15章の父親の憐れみについての教えたとえというルカの15章のところを見ても、父親が憐れみ深いという意味では、旧約時代の話が指導者という民という上下関係があると見えるのは、父親と子たちというところもこの中に入ってるからということが言えると思います。

但し、それでも申命記の17章を見ると興味深いかと思いませんけれど、約束の地に入つて回りの全ての国々と同じように、「自分たちの上にも王を立てたいと言つたら、こういう人を選んでください」と言っている教えが17章に王の戒めとしてあります。「馬を増やすな。妻を増やすな。金を増やすな。そのことを絶対に忘れるなよ。」と。どうしてかというと、王の心が自分の兄弟の上に高ぶることがないため、そのためにこの命令を特に覚えなさいと言っているわけです。自分の同胞の上、自分の兄弟の上に高ぶることがないようにということを言っています。

王を求めると言つては、回りの国々、回りの国々の王というのは、どういうものなのかというと、パロ、アビメレク、残念ながらダビデ、アハブ。自分の妻を取られるんだね。アブラハムの妻サラを取つていこうとする。アビメレクも同じで、リベカを取つていこうとするストーリーが3回ありますね。

残念ながら、ダビデはこの人たちと同じ事をやっている。ウリヤを殺して妻を奪おうとしている。アハブは畠を取ろうとしている。殺してね。妻、畠。これは十戒にあるとこですよね。

この世の王たちのその貪る自分の権力を振るう王たちのようではあってはいけないと。これは兄弟の上に高ぶることがないようにと言われているとこですけども、第1サ

ムエルの8章で、いよいよその王が欲しいと言った出来事ですね。その出来事のサムエルに民が言うわけでしょ。「そのようなことをしたらば、王はこのようにあなたたちをさばきますよと。あなたの求める方はこういうことしますよ。」と言った時に、息子を取る、戦車の前の方に行かせる、娘を取る、畑を取る、穀物を収穫を取る、財産、奴隸、ロバを取る、羊の群れの十分の一を取る。とにかく、全部、取る、取る、取る、取ると。そうやって、あなたがたは王の奴隸となる。王の兄弟ではなく王の奴隸となる。支配される力のと言うように言われていますけれども、このような王になってはいけないという意味で、兄弟の上にというふうに言われてますから、確かに上の立場ではあるんすけれども、それを悪く利用するなということが申命記の教えの中にあります。ずっとその教えの通りに従ってくれれば良いのですけど、従ったことは全然ないということですね。

イエス様が来るまで神様のしもべである預言者たちを殺し、それでイエス様が来た時にも殺すわけですけど、そのイエス様の教えの中で、マルコ10章の中でこう言いますね。「あなた方も知っている通り、異邦人の支配者と認められた者たちは彼らを支配し、また偉い人たちは、彼らの上に権力をふるいます。しかしながらあなたがたの間では、そうではありません。あなたがたの間で偉くなりたいと思う者は、皆に仕える者になりなさい。あなたが他の人の間で人の先に立ちたいと思う者は、皆のしもべになりなさい。人の子が来たのも仕えられるためではなく、かえって仕えるためであり、また多くの人のための贖いの代価として自分の命を与えるためなのです。」憐れみの支配者が本当の支配者ですと言われています。

イエス様はこの世に来た時に、私たちを兄弟と呼ぶことは恥としません。ヘブル人への手紙の2章にこうあります。聖とする方も、聖とされる者たちもすべて元は一つです。それで主は、彼らを兄弟と呼ぶことを恥としないでこう言われます。その兄弟と呼ぶことを恥としない私たちのイエス様は、憐れみ深い忠実な大祭司である。憐れみ深い忠実な大祭司は、モーセの時にはしもべとして仕えていた。キリストは神の子として仕えている。この忠実な憐れみ深い大祭司のことがヘブル人への手紙で、ずっと説明されて励まされるところですけれども、特に9章全体で、大祭司の年に1回至聖所に入る贖いの日の話が出ています。贖いの日というのは、年に一度だけその至聖所に入る。特別に贖いをする罪の赦しを一年で一番特別に求める日。これが7月の10日にある。ヘブライ語で言うとヨムキプールという祭りですね。そのレビ記16章に書いてある年に一度入りますというこの贖いの日は、兄弟のために大祭司が死ぬようなものです。それで贖いをするということがいわれていますけれど、それは兄弟のためにということだと言えるものだと思います。

いけにえをずっと捧げているわけだよね。この時だけじゃないです。もうとにかく「いけにえを捧げ、いけにえを捧げ、いけにえを捧げている」ということ自体が、罪の執り成しを求めてるということですから、契約の箱の上に血をふりかけるこの日、一番その罪の赦しを求めてる罪のとりなしをしているということが大祭司の働き。私たちの憐れみ深い忠実な大祭司という、このイエス様が今も天で私たちのためにとりなしているということは、私たちを兄弟と呼んでくれたイエス様だということですので、旧約の時代も、新しい時代も、兄弟の罪の赦しということが言えるのだと思います。確かに古い時代のほうが、兄弟ということがはっきりしなかったけれど、イエス様が来たので、もっと私たちは神様の兄弟と呼ばれているんだということがはっきりしたという意味で、この違いは確かにある。でも続いてるということだと思います。